

千葉のまちのあゆみ

桓武天皇のひ孫である高望王の子孫、平常重が、大椎(現緑区大椎町)から千葉に本拠を移したのは、大治元年(1126年)6月1日のことでした。

千葉に移住した平常重は、地名を名字とし、千葉姓を名乗りました。千葉氏の名称は、下総国内で最大級の荘園であった千葉庄に由来します。千葉庄は陸海の交通の拠点でもありました。

千葉常重の子、千葉常胤は、源頼朝に付き従い、鎌倉幕府の創設に重要な役割を果たしました。その後、鎌倉時代から戦国時代にかけて、千葉のまちは賑やかな都市として栄えました。

江戸時代になると、千葉のまちは、陸路と海路が交わる港町・宿場町として発展しました。房総半島から千葉に運ばれた荷物は、港町で船に積まれ、江戸まで輸送されました。

明治6年(1873年)に県庁が置かれると、千葉のまちは政治・経済・教育・文化の中心となり、大正10年(1926年)の市制施行で千葉市となりました。

昭和20年(1945年)の2度の空襲で大きな被害を受けましたが、戦後復興期や高度成長期を経て、千葉のまちは拡大・発展し、平成4年(1992年)には全国12番目の政令指定都市に移行しました。